

陰影のある人形

辻 憲男（文学部教授）

青空の下、洲本の町を歩く。土蔵作りの店の構え、太い角材を使った出格子、重い丸瓦の屋根、うるし、醤油、油などの文字の看板、屋号を染めぬいた紺のれん。町家の白く冴えた壁の色に、要（かなめ）は「しみじみと心が吸い取られるような気がした」。明るく花やかでありながら、渋みがある。往来が明るいから、昔風の家は奥が暗い。「そう言えばああいう所にこそ、文楽の人形のような顔立ちを持った人たちが住み、あの人形芝居のような生活をしていたのであろう。どんだろの芝居に出て来るお弓、阿波の十郎兵衛、順礼のお鶴、－などというの^{たでく}が生きていた世界はきつとこういう町だったのであろう」（谷崎潤一郎『蓼喰う虫』）。

主人公・要は妻の父の道楽につき合っ、淡路の人形浄瑠璃を見物に来た。のどかな野天、人形は鄙（ひな）びて目玉がよく動く。島の人たちは芝居よりも人形そのものを愛し、まるで「我が児を舞台に立たせる親のようないつくしみ」をもって眺める。「どんだろ」は『傾城阿波の鳴門』の、お鶴が三つの時に生き別れた母にめぐり逢うが、母は親子の名乗りをせず、哀切な名場面。「その親たちの名は？」「かか様はお弓と申—します」。

小説中の義父は年若い「お久」を同伴していた。要は心の離れた妻よりも、この古風な「京人形」に引きつけられた。…作家谷崎としては、西洋趣味を脱して古典の陰影へと回帰する、神戸岡本での第一作であった。



洲本市本町にのこる商家遺構、左海屋（さかいや）。